

“把”の働きから見た“把”構文

本間由香利

0. はじめに

学習者は介詞をさほど難しい文法事項ではないと感じる。それは“小李在食堂吃饭。”や“他给弟弟买手表。”の介詞部分“在”、“给”の意味は特に説明されなくとも日本語の知識（“在”は「存在」、「给」は「給う、給付」を表す等）から場所や受益者を表していることが類推でき、“在”は日本語の「～で」、「给」は「～に」と対応させて覚えられる¹⁾からである。

しかし“把”構文は他の介詞とは別に、学習がかなり進んだ段階、結果補語、方向補語などの後に学ぶ。しかし“把”構文の目的語は既知であるとか、動詞に他の成分が必要である、などと説明を聞いても学習者はそれまでの経験から“把”を「～を」と対応させて覚えようとし、その結果、「彼は窓を閉めた」を“他关上窗户了。”と“他把窗户关上。”のどちらに訳せばいいのかが分からなくなってしまうのである。

動詞として使われることもある“在”、“给”に比べて“把”は“把”構文以外で使用されることは極めて少ない。“把”構文の特徴は目的語や動詞の付加成分にあるので教学上の重点もここに置かれるのは当然だと思われる。しかし日本人の日本語「把」についての一般的な知識は、束ねたモノを数える語（例：一把）や、「把握」という語を構成する要素になる、といった程度で使用頻度も高いとは言えず、中国語の“把”を日本語からの類推で理解できるとは言いがたい。

そこで本論では“把”構文が難しいと言われるのは、教学の場で“把”についての説明がほとんどされていないことが原因なのではないだろうかと考えて

みた。“把”構文を理解するために、他の介詞と比較しつつ、構文全体ではなく先ず“把”自身の意味を検討することから始めたい。

1. “把”の動作性

1-1. 介詞の動作性

主な介詞は、実際の動作やモノではなく動作の場所や対象者、空間や対人関係など「抽象的な関係」を表すことが多い。(1)～(3)の分類は木村2003を参照)

(1) 動作と場所との関係性を述べる“在、从、往、离、向”など。

- a. 小李在食堂吃饭。
- b. 他在美国开公司。
- c. 小王从上海回来了。
- d. 阳光从天窗射进来了。
- e. 小李把小林送到医院去了。

(2) 動作の動作対象者を導く“给、跟、为(了)”など。

- a. 他给弟弟买手表。
- b. 小李跟小林结婚了。

(1)、(2)の介詞部分は、いずれも動作の向かう先を示すのみで動作性は感じられない。しかし(3)の“用”、“拿”を介詞とするかどうかについては判断が分かれることもあるようである。

(3) 道具や材料/方法を導く“用、拿”。

- a. 日本人用筷子吃饭。
- b. 他拿钢笔写字。

辞書、教科書等の“用”、“拿”にはそれぞれ「介詞」、「動詞」としての立項があり、動詞と介詞の違いは、重ね型に出来るかどうか、実際の動作を伴っているかどうか、とされているのだが用例を見ただけでは判断がつかないような場合もある。これはモノが眼前にあると、動詞“用、拿”(「～を使って/手にとって」)の意味、つまり動作が意識されやすくなるからであろう。ここに他の介詞“在”、“给”などが「抽象的な関係」を述べていることとの差異がある。介詞と言っても動作性をどの程度残しているかどうか、という点からみると、一様ではないことが分かる。

1-2. “把”の意味再考²⁾

そこで“把”についてであるが、《現代汉语规范字典》によるとその意味は①【動詞】手に取る（车拐弯儿了，请把好扶手。）、②【名詞】ハンドル、③【動詞】掌握する（妻子把着家里的财政大权。）、④【動詞】守る（两条狗把着大门。）、…⑨【介詞】…を（処置文をつくる）、となっており、最も基本となる意味は①【動詞】手に取る、であることが分かる。では“把”構文の中で使用されるとき、動作性は感じられるのかどうか見てみたい。次の(4)と(5)は、“把”構文の全体の意味が、大きく「目的語に状態変化を起こさせるもの」と「目的語の位置を移動するもの」の2つに分けられる（張2000）ことから、この定義に従い分類したものである。

(4) 「目的語に状態変化を起こさせるもの」

- a. 他们把那个瓶子打破了。（大堀2000）
- b. 你把菜炒咸了。
- c. 这个消息把他们高兴坏了。

(5) 「目的語の位置を移動するもの」

- a. 要是钢条软了一根，拿回来，把它摔在我脸上。
- b. 请把它们按大小排列起来。
- c. 我一不注意，把照相机掉了。

大堀2000は(4)a.を例に挙げて「“把”は動作の向かう対象を表しており「～を手にとって、それから割った」という経過は捨像され、対象物が作用の直接の対象と捉えられている」と述べ、“把”の部分に動作性を認める記述をしていない。確かに(4)は連動文で言えば第1の動作に相当する動作（(4)の場合「瓶、料理、彼ら」を掴む）は存在しておらず、すでに「関係」だけを言うものになっている。位置の移動を述べる(5)も動作性は動詞“摔”、“排列”“掉”内にのみ認められる。

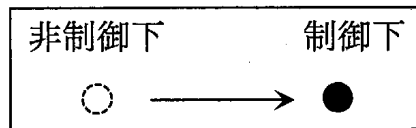
では“把”も他の介詞と同様に関係だけを言うものなのか。“给”との差異を述べた木村2002を参考に考えてみたい。

- (6) a. ??老王给我李老师的盒饭。 b. 老王给我盒饭。

c. 老王把李老师的盒饭给我了。

「王さんが李先生のお弁当を私にくれた」という意味で (6) a. は不自然である。これは「給」が自分の支配領域に属さない事物を、さらに別の人の所有領域に移すような事態に適さない」からであるといわれる。「把」構文は「場所1の位置にある事物を場所2の位置に移すという事態に対応する構文」であるので、他人の所有物を第三者に譲渡する意味を表すには (6) c. が相応しい。介詞が表すのは主語と介詞フレーズを構成する目的語との「関係」であるが、「把」は支配領域に関わらず、目的語を動作主の制御可能な対象物であるとして捉えたことを示す。ここに他の介詞とは異なる動作性が感じられるのである。

(6) c. 老王 把 李老师的盒饭 给我了。
 control under control



《“把”の働き》

この図は、非制御下にあったモノが“把”の働きにより制御下に置かれたことを表している。また制御下に置くということは、焦点化する / rockon (瞄准対象) などとも言い換えることもできるだろう。本論で言う“把”の動作性とはこの動きのことを指す。このことは陳2002が“把”の中心的意味を“控制住某种东西 = control”とし、“把”構文中の“把”の中心的作用を“A控制住B (起因=A、対象=B)”としていることとも合致している。

1-3. 制御下に置かれている目的語

“把”は動詞の意味（「握る、掌握する」など）を強く残し、目的語を制御下に置くのだ、と理解すると“把”構文の目的語に対する制限に関連性が見えてくる。

次の例の目的語が「全て」を表すのは“把”が目的語を制御下に置き、その範囲を限定するからである。（(7)は張2000より）

- (7) a. 他喝了酒。 他喝了一些酒。 *他全/都喝了酒。
 b. 他把酒喝了。 *他把一些酒喝了。 他把酒全/都喝了。

“把”の働きから見た“把”構文

(8) 把书放在书架上再走。(本を(全て)本棚に置いてから行く)

(7) a. の動詞+目的語の語順は「全て」という意味を含意せず、また“全／都”を挿入することもできない。“把”構文の場合、動詞の特性とは関係無く、つまり対象の消滅義を持つ“喝”や移動義の“放”であっても動作は“把”が制御下に置いた対象物「全て」に及ぶのである。また、総称を指示できるのも“把”の働きにより一時的に「制御可能なモノ、或いは全量」と捉えることができるからであろう。

(9) a. 我们平常把大豆拿去榨油，主要目的是为了提取它所含的脂肪……。

[大豆是个宝]

b. 那末，应该怎样努力才能把字写好呢？ [大胆练写字]

さらに“有些，那些”などの語彙があり、数として不定であっても動作対象として確定していると捉えることができる。

(10) a. 她把那些花插在花瓶里。

(彼女はそれら(全ての)花を花瓶に挿した)

b. 他们确实把有些工作做得很好。[青春万岁]

(彼らは確かにそれらの仕事(だけ)はきちんと行った)

次に「テレビ番組」というソフトを指示することが出来ず、「(受像機としての)テレビ」とハードを指す意味になる(11)の例について見てみる。安井1999はこの例文の容認度は低いが、機械としてのテレビを調べるのであれば成立するとし、それは“把”構文が“看”の能動性が高い読みを優先させ(12)のように「見る／調べる」という意味を導くからであると考えている。

(11) ??他把电视看了一遍。

(12) 把他的东西细细看了又看。(安井1999)

「調べる」対象としては「番組」よりも機械のほうが相応しいだろう。しかし「見る」と「調べる」は意味上、近い位置にあり、「調べる」の意味で「見る」と言うこともでき、分けることが可能なのか疑問である。また、刘2000では“把”構文に適應できる動作には自主性が求められているとし、文章は自分の意志で見ることができ、映画は上映していなければ見ることができない、

として次の例を挙げた。

(13) a. 你把这篇文章看看。

b. *你把这部电影看看。 (刘 2000)

(11) “电视”、(13) b. “电影”は動作の自主性により成否が分かれるのだろうか。では自分の意志で見ることが出来るパソコンはどうか。やはり“把”構文に適應せずパソコン本体、そのモノを見るという解釈になり、動作の自主性では分析できないことが分かる。

(14) 你把我的电脑看一看。

こちらもパソコンの画面上に映し出された映像や文字ではなく、機械を指す意味にしかならない。これら“看电视／电影／电脑”に共通するのは、見ている対象が換喩（メトニミー：隣接／近接関係に基づき、ある事物を別の事物で指し示す比喩）により言語化している点である。「テレビを見る」と一口に言っても実際に見ているのはモノではなく「ブラウン管の表面？／ブラウン管の中の光…」などである。“看”の対象を、過度な言語化を嫌うため換喩により“电视／电影／录像带”などの語彙を用いていると考えるのが適當であろう。

“把”が求める制御可能なモノが眼前にあれば、真っ先にそれが指示対象として採用され（“电视／电脑”など）、制御下におくべきモノの存在がない場合（“电影”）は文が非成立となる。

以上、考察の対象としてきたのは眼前に対象として具体的なモノが存在している例であるが、“把”構文の目的語は当然、具体的なモノだけでなく抽象的なモノも存在している。

(15) a. 希望把费用控制在—万日圆以内。

b. 她把主要精力集中在数学学习上。

c. 把每天的生活情况详细地写在信里。

d. 希望把合同的期限再延长—年。

e. 把时速加速到 50 海里。

“费用”“主要精力”“每天的生活情况”はそれぞれ手に掴むことができるモノではないが、ここでは動作対象として制御可能なモノとして扱われている。

次に場所を表す語が目的語の位置に生起する場合について考えてみる。

- (16) a. 他把北京城跑了个遍。
b. 她故意把自己的脸上都涂上煤烟灰土。
c. 他把自己脚底下打扫得很干净。
d. 我们把宿舍打扫得很彻底。

これらは動作主の意志が“北京城”“脸上”“脚底下”などを、動作の場ととらえたことを“把”が表している。ただしこの場合、真に動作が対象物の全てに及んでいるとは考えにくく、一種の誇張表現であると言える。これまで見たように、“把”の後ろに置かれた目的語に“全／都”が無くても「全てを」という意味が付加されるが、それは今までの分析のように、また以下の(17)のように、場所やモノに関わらず“把”構文の目的語全てに共通する特性である。

- (17) a. 我把(整辆)卡车(都)装上了干草。
b. 我把(所有)干草(都)装上了卡车。

これらは全て“把”構文の目的語として基本的なタイプであると本論では考えている³⁾。

2. “把”構文のその他の目的語

第1章で“把”は目的語を制御下に置くことであると述べたが、この基本原則とは一見、ズレていると思われる目的語が生起する場合がある。

2-1. あるように見えて実は無いモノ

張2000は動詞に“了”のみ⁴⁾を付加して成否が分かれる例として、以下の例を挙げている。

- (18) a. 把小背心脱了。 b. *把小背心穿了。

張2000が挙げる例には“脱—穿”の対立の他に“扔—捡”、“说—听”などがあり、一方は“把”構文中で生起し他方は生起できない。

- (19) a. 王一生把衣裳脱了, 只剩一条裤叉, 呼噜呼噜的洗。[棋王]
b. *王一生把衣裳穿了, …… (王一生は服を着て…)

- (20) a. 他把烟屁股使劲儿扔出门外, 眼睛又放出光来… [棋王]
b. *他把烟屁股捡了, … (彼は吸い殻を拾って….)
- (21) a. 我今天可是把心里话都跟你说了, …
b. *把心里话从你那儿听了, …

この例を張 2000 では“(穿) 小背心”の“自立性”の問題である、としているが“自立性”とは何であるのかが非常に分りにくい。(“对人的身体来讲, 要穿的背心不可能脱离“穿”这个行为而独立。相反, 穿上的背心能脱离动作“脱”而独立, 所以第一句中“背心”是自立的, 第二句的“背心”却不是自立的。”人間の体から言うると着ようとしている“背心”は動作「着る」から離れ独立することが出来ない。逆に着ている“背心”は動作「脱ぐ」から離れ独立することが出来る。最初の“背心”は自立し、二番目の文の“背心”は自立していない。張 2000 より引用)

そこで本論では、ほぼ同様のことを述べていると思われる古川 2000 を参考に考えてみたい。従来の分類では受事目的語(“(丢) 鞋”)、結果目的語(“(出) 汗”)と分類されるであろう例を“起点”、“终点”という観点から分析している。

- (22) a. 他跑丢了一只鞋。
= “他”是“一只鞋”原来存在而消失的“起点”。
b. 他跑出了一身汗。
= “他”是“一身汗”出来的“终点”。

上記を参考に一般に受事目的語と分類される“(穿) 衣服”、“(脱) 衣服”を考えてみる。

- (23) a. 他脱了衣服。= “他”是“衣服”原来存在而消失的“起点”。
b. 他穿了衣服。= “他”是“衣服”穿上的“终点”。

a. の“衣服”は《● → φ》で表すことが出来る、動作前から存在し動作の結果なくなるモノであり、b. の“衣服”は《○ → ●》の様に動作後に出現するモノである。(19) - (21) の例で非文となっている例は、動作以前に現実社会に存在していても“穿衣服”の“衣服”のように動作後に現れるモノを目的語としているので“把”構文に適應できない、と考えることが出

来るのではないか。上記を参考に (20)、(21) を再考する。

(20') a. 他把烟屁股使劲儿扔出门外… = “他”是“烟屁股”原来存在而扔出去的“起点”。(「彼」は「吸い殻」が元々存在し、捨てられる「起点」である。)

b. *他把烟屁股捡了… = “他”是“烟屁股”捡上的“终点”。(「彼」は「吸い殻」が拾い上げられる「終点」である。)

(21') a. 我今天可是把心里话都跟你说了, …

= “我”是“心里话”原来存在而说出来的“起点”。(「私は」は「心に思っていること」が元々存在し、話される「起点」である。)

b. *把心里话从你那儿听了, …

= “我”是“你那儿心里话”听的“终点”。(「私」は「君の思っていること」を聞く「終点」である。)

一般的に“穿衣服/脱衣服”、“扔~~~/捡~~~”の目的語は、受事目的語と分類されているが、“脱”“捡”は動作を通じて目的語を「終点」に移動する動作であり、結果目的語に近い性質をもっていると言える。

2-2. 無いように見えて実はあるモノ

他の SVO 言語にも前置詞による目的語前置と、それに対する影響を述べる構文があるが、製作動詞 (例「お湯を沸かす」) はこの構文に適應できないそうである。沈 2000 も (24) (25) の成立/非成立を、動作以前に目的語となるモノが存在していたかどうかによるのだ、とした。存在しないモノへの処置はできないということである。(25) では元々存在していた“字”を消す動作なので成立するが、(24) は動作“写”の結果、出現する“字”に対する動作となり、これは不可能なので成立しないというのである。

(24) a. *他把黑板上的字写了。 b. 他写字写在黑板上。(沈 1999)

(25) a. 他把黑板上的字擦了。 b. *他擦字擦在黑板上。(“ ”)

しかし調査の結果、また齐, 唐 2001 によっても動作の結果出現するモノが目的語として前置された製作動詞を使っている文が存在することが明らかになっている。但し無条件に成立が可能なのではない。

(26) a. ??他把字写了。 (??他把字写在黑板上。)

b. 他把答案写在黑板上。

c. 我便把我的电话号码写在她的本子上。

“答案”、“电话号码”とはいえ、「文字を書く」行為に変わりはないが b、c は成立し、a は非文となる。しかしこれらは語彙による補完が行われていると考えられるのではないか。“答案”、“电话号码”は「頭の中にあった答えを書き移す」や、あるいは別のところに書いてあった「正解を書き移す」等と抽象的な移動行為として認識しやすいのに比べ、“写字”は無からの創造のように考えられ移動とは認識されにくいので非成立となる。

また“买”が“把”構文において“+了”のみで使用できるかどうかは先行研究によって判断が分かれる(沈 1999)が、前後にフレーズがあれば成立するとされることがある。

(27) a. ??把书买了。

b. 你怎么还是把书买了？真不听话。(君はやっぱり(あの)本を買ったのか？本当に言うことを聞かないんだな。)

a. の“书”は既知か未知か判断が分かれるのに対し b. は話者と聞き手の間の既知の「(あの)本」というように文脈による補完があるので成立できるのである。前後の文脈が無く、主体が初めてその存在物を認知したと考えるモノ((27) a. “书”)のに対する動作は考えにくい。よって a. は非成立となり、動作により単に移動しただけとみなす b. は成立できる。

これらは動作前には存在していないが、あるべき対象としてのイメージが先ず存在し、それを出現させたことや、その移動を述べるものである。ただし、これらの目的語に対しては文脈内の推論や語彙により補完が行われなければならない。

このタイプは、基本的なタイプの派生的なものとして捉えることが出来るであろう。

2-3. 意外性を表す“把”構文

張 2000 によると“把”構文の表す意味は、大きく「目的語に状態変化を起

こさせるもの」と「目的語の位置を移動するもの」の2つに分けられるとされるが、他の先行研究では更に「意外性を表す」という項目がある場合も多い。(28)は《八百词》が好ましくない事態が発生したことを述べる、として挙げている例で、(29)はその他の先行研究で意外性を表す、とされている例である。

- (28) a. 偏偏把老李给病了。
b. 真没想到，把个大嫂死了。
- (29) a. 我一不注意，把照相机掉了。
b. 他们把犯人跑掉了。
c. 我们把他没办法。

“把”の働きは、それに続く目的語を制御下に置くことなのだが、意外性を表すとされる例文に共通するのは、副詞（“偏偏”）、動詞（“病，死”）や、語彙（“不注意，犯人”）などの他の要素が「制御」とは逆の意味を述べていることである。制御下に置いたものを「よりによって」、「病気に」してしまったり「死なせた」り、制御下に置いた、或いは捕まえた犯人を「逃がし」てしまったりと、意思とは逆の事態が起きている。ここに我々は意外性を見るのではないだろうか。

更に目的語に“个”が付加されている例があり検討を要すると思われる。これらの例は、意外性を表すと説明されている例と重なる場合が多い。

- (30) 小张把个孩子生在火车上了。
(31) 把个小王听得入迷了。 《八百词》

しかしこれらの例は“个”が無くとも文は成立できる。

- (30') 小张把 孩子生在火车上了。
(31') 把 小王听得入迷了。

ではこの“个”の役割は何なのか。“个”の働きは「概数の前に置き軽い口調を表す（“每星期来个一、两趟”）、ちょっと～するという軽い口調を表す“写个字”“吃个饭”《八百词》）以外に、「実体のあるモノを新しい、未知の情報として会話中に導き入れる」働きがある。（大河内 1985 参照）

これを“把”構文に当てはめてみると、“把”の働きによって目的語を制御

下に置いた後、故意にそれをまた新しいモノであるかのように再認識する動作が「+“个”」と考えらる。

インフォーマントによると“个”の無い例で既に「意外性」を表しているが(これは“孩子”を生むような場所として“火车”が相応しくないという語彙の組合せから)、“个”があると更に「意外性」が強まると言う。“个”を加える操作により目的語は“把”構文中で新しいモノとして認識され直し、(30)では「なんと子供を」、(31) a. では「他の誰でもない、あの“小王”が」という新情報がここでもたらされるのである。そして結果的に本来の“把”構文(移動や処置結果を述べる)とのズレが生じ、意外性を述べる事が主な意味となるのではないだろうか。この“个”が付加された例は“一个”へと置き換えすることが出来ないことから“个”は既に量詞の機能を失い、別の役割を担っているとも考えられる。

本論は“把”の動作性を再認識することで“把”構文に生起する一連の目的語に共通性を見出すことを目的とした。ただし動詞の後置成分により目的語の捉え方がかわる場合もある⁵⁾が、それも“把”の動作性との関連で分析が可能であると考えられる。今後の課題とする予定である。

(文中で出典明記のない例は作例であるが、複数の中国語話者のチェックを受けている。)

注

- 1) 単純に“给”を「～に」、 “在”を「～で」としてしまうことが後の学習の弊害となることがあり決して簡単な問題ではないのだが、これは“把”との学習しやすさの比較からの記述である。
- 2) “把”の介詞としての用法は、通時的に見るとかなり早い時期から存在し、その形式は現在と同じ「把」+(代)名詞+動詞であった。しかし近代に「叱責、嘲笑、相手を責める」など強い不満を表す特殊用法として「動

“把”の働きから見た“把”構文

詞のない“把”構文」が存在していたと言われている。これを蔣 2003 は“把”構文に動詞が無いのではなく“把”自身が動詞なのである、という見解を示した。例：我把你这偷灯油的贼！（《西游记》）

- 3) ただし“把”の働きは対象を制御下に置くことまでで、その結果については後続の動詞と付加成分によって述べられる必要がある。つまり対象全てに影響が及んでいても結果が異なれば、敢えてその結果を述べる必要があるのである。次の例文は結果が動詞の後の付加成分として述べられているが、意味上、動作対象物は全て、結果は一部、つまり〈全体—部分〉の関係となっている。
 - a. 他把一盏酒淹一半在阶基上。（沈 2002）
 - b. 怎肯把军情泄露了一些儿。（沈 2002）
- 4) “了”はこの場合“掉”に近い意味で用いられているという報告がある。
- 5) それは次のような例である。a. の“衣服”は脱いだ、つまり取り替えられたほうの衣服を指し、b. の“衣服”は取り替えた後の衣服を指すという。
 - a. 把衣服换了。
 - b. 把衣服换上了。

【主要参考文献】

大河内康憲 1985 「量詞の固体化機能」『中国語学』232号 日本中国語学会。

大堀壽夫 2002 『認知言語学』東京大学出版会。

木村英樹 2002 「Zの所有領域」『中国語』Q&A 2003年3月 内山書店。

———2003 「中国語動詞の文法化およびその制約」文法学会研究会連続公開講義レジュメ7月。

杉村博文 2002 〈论现代汉语“把”字句“把”的宾语带量词“个”〉《世界汉语教学》2002年第1期。

古川 裕 2000 〈有关“为”类词的认知解释〉《语法研究和探索（十）》2000年，商务印书馆。

松本 曜 2003 『シリーズ認知言語学入門〈第3巻〉認知意味論』大修館書店。

安井二美子 2000 「“把”構文と他動性」日本中国語学会関東支部例会レジュメ1月。

- 1997「“把”構文における目的語」『中国語学』日本中国語学会。
- 1999「“把”構文述部における必要条件」『中国語学』日本中国語学会。
- 陈爱玲 2002〈什么时候用“把”字句，为什么用“把”字句——“把”字句教学方法探索（1）——〉『紀要35』慶応義塾大学語学視聴覚教育研究室。
- 蒋平 2003〈是无动把字句还是一种行事句〉《中国语文》2003年第5期。
- 李行健主编 1998《现代汉语规范字典》语文出版社。
- 吕叔湘 1999《现代汉语八百词增订本》商务印书馆。（1980《現代漢語八百詞》）
- 齐沪扬，唐依力 2001〈与“把+O+V+L”句式动词配价相关的几个问题〉《现代中国语研究》朋友书店。
- 沈家煊 1999〈“在”字句和“给”字句〉《中国语文》1999年第2期。
- 2002〈如何处置“处置式”〉《中国语文》2002年第5期。
- 张伯江 2000〈“把”字句的句式语义〉《语言研究》2000年第1期。

（ほんま ゆかり・お茶の水女子大学大学院博士後期課程）